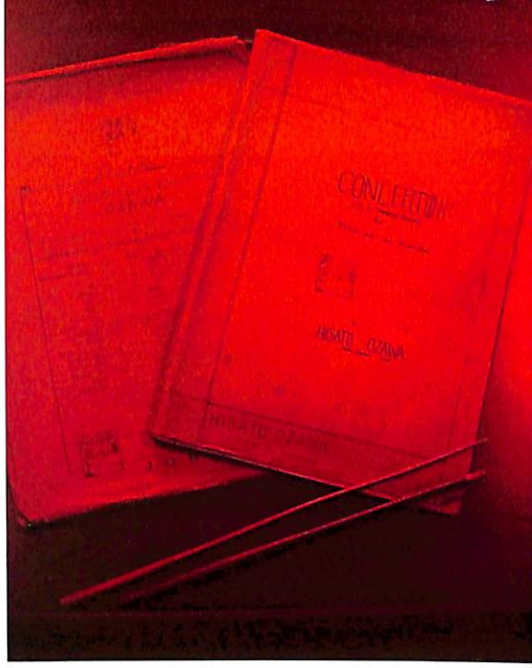
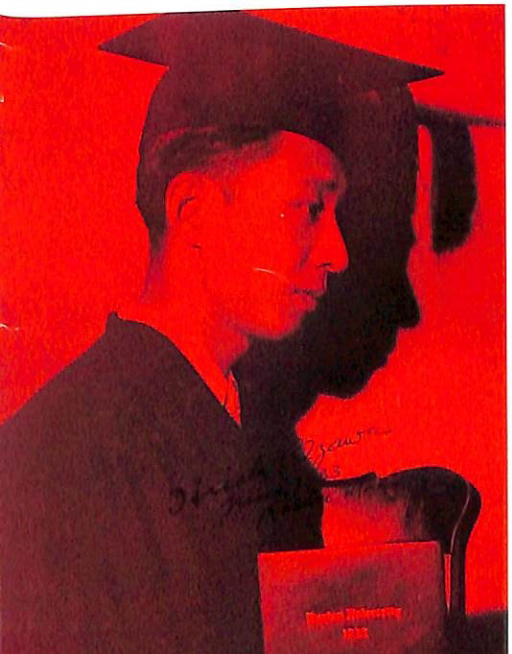
神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による



大澤壽人スペクタクル IV

戦前のウルトラモダンから
戦後の混声合唱まで



2015年3月22日 日

開　演／13:30（13:00開場／ロビー展示あり）
場　所／兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホール

Hisato Osawa IV

戦前のウルトラモダンから
戦後の混声合唱まで

Contents ／目次

ご挨拶

大澤資料プロジェクト　P. 2

大澤 壽文・佐智子、本庄 徳子　P. 3

大澤壽人先生略歴　P. 4

神戸女学院所蔵資料
「大澤壽人遺作コレクション」と目録『煌きの軌跡』　P. 5

出演者プロフィール　P. 6

プログラム　P. 7

プログラム・ノート　P. 9

戦前のウルトラモダンから戦後の混声合唱まで

生島 美紀子

演奏会に寄せて

大澤資料プロジェクトの普及活動と〈スペクタクル〉シリーズ

本日は〈大澤壽人スペクタクルⅣ〉にご来場頂きまして、有難うございます。

戦前はボストンとパリ、戦中・戦後は関西を拠点に目覚ましい音楽活動を展開された天才作曲家、大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）先生の作品を紹介する演奏会も、シリーズ4回目を迎えました。

先生の華麗なキャリアは、1930年代に「世界楽壇で通じる一流音楽家」と認められたことによって築かれました。アメリカ留学中に日本人として初めてボストン交響楽団を指揮し、フランス留学中にパリ・デビューして大成功を収めるなど、欧米楽壇で喝采を浴びた先生は、戦前の日本洋楽史における数々の快挙を成し遂げられたのでした。

しかし戦後、先生は活動の絶頂期にあった1953年に47歳で急逝され、年月と共に人々の記憶から遠のいてゆきました。一方、大澤家は自筆譜を中心に3万点に及ぶ遺品資料を半世紀以上も保管され、2006年にすべてを神戸女学院へ寄贈なさいました。

私たちは「大澤壽人遺作コレクション」と名付けられたこの貴重な資料群の一点一点すべてに目を通し、5年をかけて学術的な観点から読み込んで、2冊の目録『煌きの軌跡Ⅰ・Ⅱ』を編纂しました。その過程で姿を現してきた先生の音楽活動の全貌は、驚くべきものでした。1000に近い作品を遺され、目を見張るように豊かな作品世界を築いておられたのです。

80年以上も前に作曲されたとは思えない作品の生命力、その素晴らしさを一人でも多くの方に知って頂きたい　――　そう願うようになった私たちは、神戸女学院での調査に加え、2009年に「大澤資料プロジェクト」を自ら設立し、作品の掘り起こしと積極的な普及活動を開始しました。

講演会、作品解説、コンピューター譜作成と校訂、『大澤壽人ピアノ曲集』出版、新CD「大澤壽人　駆けめぐるボストン・パリ・日本」制作など、大澤家と本庄家（御子息夫妻と御息女）から温かいご支援を頂きながら、先生の音楽を広めるために様々な形で発信を続けています。その中でも〈スペクタクル〉の開催は普及活動の中核を成し、世界初演や復活演奏を行うなど、研究と演奏を密接に結びつけた日本でも有数の試みとして評価されています。

今回も作品を選りすぐりました。第1部はボストン・パリ留学時代、第2部は帰朝演奏会の頃から晩年まで、秀作を集めて構成しています。大澤壽人先生の煌く音楽をどうぞお楽しみ下さい！

大澤資料プロジェクト代表　生島 美紀子

スタッフ：増永 智子、松川 峰子、高野 雅子、廣瀬 聖子

※『大澤壽人ピアノ曲集』はカワイ音楽教育研究所長増田英和氏のご協力、CD「大澤壽人 駆けめぐるボストン・パリ・日本」は兵庫県立芸術文化センター管弦楽団・レジデントコンダクター岩村力氏の監修を頂きました。

ごあいさつ

本日はご多用のところ、〈大澤壽人スペクタクル〉にご来場下さいましてありがとうございます。

2009年に〈大澤壽人スペクタクルⅠ〉が当ホールで開催されてから早いもので5年3ヶ月が経ち、本日第4回を迎える事が出来ました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。又、主催である大澤資料プロジェクトの代表、生島美紀子先生をはじめ、関係者各位の皆様のご尽力に心から感謝しております。

本日は父、大澤壽人のボストン・パリ留学時代の作品や、帰国後の朝日放送ラジオ番組の「ホームソング」で歌われた曲など、盛りだくさんのプログラムとなっております。最後までごゆっくりとお楽しみいただけましたら幸いです。

尚、私事で恐縮ですが、昨年7月に母の澄子が93歳で長寿を全う致しました。本日は祖父の壽太郎、祖母のトミを交え、壽人と4名で天国よりこのコンサートを楽しんでいる事と思います。

この〈大澤壽人スペクタクル〉が末長く続きますよう、今後ともご支援賜りますよう心からお願いし、ご挨拶とさせて頂きます。

大澤 壽文・佐智子
本庄 徳子

大澤壽人先生・略歴

明治39年（1906）8月1日兵庫県神戸市に生まれる。関西学院高等商業学部卒業後、昭和5年（1930）に渡米。ボストン大学音楽学部、続いてニューイングランド音楽院で学び、フレデリック・コンヴァースに師事する。交響曲・協奏曲・室内楽曲など数多くの演奏会用作品を作曲し、大学卒業時の昭和8年（1933）6月には、ボストン交響楽団（ポップス）を率いて自作《小交響曲》を披露。同楽団を指揮した初めての日本人となった。

昭和9年（1934）パリに渡り、ポール・デュカとナディア・ブーランジェに師事。翌昭和10年（1935）11月にコンセール・パドゥルー管弦楽団を率いて、作品発表と指揮による大演奏会を開催。《交響曲第二番》などの前衛的な作風と、本場のフランス作品を指揮した実力で、大成功を収めた。日本の作曲界全体が海外進出を模索する時代に、いちはやく「欧米楽壇で通用する作曲家」という高い評価を受け、当時の日本人音楽家として稀な、華麗なキャリアを築いた。

昭和11年（1936）に帰国した後は神戸女学院の教壇に立ちながら、ラジオ用音楽や音楽劇、宝塚や松竹歌劇団用の付随舞台、映画音楽、ジャズ風協奏曲から校歌や社歌に至るまで、幅広いジャンルにおいて多彩な作品を創作。教育者・作曲家・編曲家・指揮者の役割をすべて担う実力派として活躍の最中、昭和28年（1953）10月28日に47歳で急逝。作曲・編曲合わせ1000曲近くを遺した。

亡くなった後は長らく忘れられ、また大澤家に保管されている遺品の存在も忘れられていたが、21世紀になる頃、神戸新聞社藤本賢市氏と音楽評論家片山杜秀氏によってその存在が明るみに出た。没後半世紀を経て、片山氏監修によって代表作《交響曲第三番》《ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲》のCDがリリースされると、「平成16年度（2004）文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞」を受賞。

続いて《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》のCDもリリースされ、作品の素晴らしさが再び大きな話題を呼んだ。昭和初期から10年代（1930年代）の日本人作曲家による作品とは思えない斬新さが衝撃を与え、戦前・戦後の日本洋楽史における重要な作曲家としての再評価が急速に進んでいる。

平成以降、演奏会場に於いて大澤作品を取り上げた音楽家は、曲目を交響曲と協奏曲に限っても、アリス＝紗良・オット、飯守泰次郎、飯森範親、神代修、迫昭嘉、佐渡裕、寺岡清高、野平一郎、本名徹次、三輪郁（五十音順）など、国内外で活躍中の指揮者と演奏家の名が挙がる。これらの日本を代表する音楽家たちが大作の演奏に取り組み、作品の風格に深い敬意を表明している。演奏団体は関西フィルハーモニー管弦楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団、デュッセルドルフ交響楽団、オーケストラ・ニッポニカなどで、日本から世界にわたって作品は高い評価を受けている。

人々が注視するなか、平成18年（2006）に大澤家より神戸女学院へすべての遺品資料が寄贈された。

神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」と 2冊の目録『煌きの軌跡』

大澤壽人先生が遺された音楽関連資料は、「生誕100年」にあたる2006年にご子息大澤壽文氏から神戸女学院に寄贈された。自筆譜やパート譜、演奏会プログラム・ポスター、書簡、写真、録音テープ、愛用の指揮棒など、段ボール43箱にも及ぶ膨大な資料群である。神戸女学院に於いては、濱下昌宏図書館・史料室長（当時）を中心とする委員会によって「**大澤壽人遺作コレクション**」と命名され、学院の宝となった。

コレクションは、貴重な自筆譜だけでも約1万枚、関連譜約2万枚、他の資料も合わせると総数約3万点を超える。これらのすべては、生島美紀子非常勤講師を中心とする特別チームに委ねられた。

学術調査を始めたチームは、早くも1年後の2007年に楽譜主体の『**煌きの軌跡－大澤壽人作品資料目録－**』を編纂し、音楽学部同窓会クラブファンタジー（会長：岡田晴美名誉教授）の全額助成のもとに刊行。目録は先生の旺盛な創作活動を世に伝えたとして、2008年度音楽クリティック・クラブ特別賞を受賞した。

続いて、2011年に神戸女学院から刊行された2冊目の目録、『**煌きの軌跡Ⅱ－神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録－**』の編纂は大事業となった。この目録では、楽譜周辺資料の子細な情報までを網羅し、ID番号によって統合して、作品名の下に全情報を集約するという画期的な方法をとった。代表作である《ピアノ協奏曲第三番　神風協奏曲》を例にすれば、まず書簡や創作ノートや自筆譜から創作期間を特定。そして多種の項目を設けた：表紙記載内容・自署と印の種類・楽器編成・楽章構成と小節数・用いられた筆記具・五線紙サイズ（以上自筆譜関連）、パート譜の有無・演奏時間（以上演奏関連）、演奏会開催日時・演奏者・演奏会写真・プログラム・ポスター・チラシ・チケット、関連記事（以上演奏歴関連）・放送日時・演奏者（以上放送歴関連）、録音日時・演奏者・音源の有無（以上録音歴関連）― これらが一目でわかる仕組みである。

さらに上記の全情報から抽出して、「大澤壽人略年譜」「作品年譜」「演奏会と公演一覧」「放送一覧」を新たに作成した。膨大な作品群にあらゆる側面からアプローチし、“何年何月何日何時”に至る正確さと克明さをもって記している。

これらの成果によって、これまで幻とされていた天才作曲家の音楽活動の全貌が、初めて明らかになったのである。寄贈前に70余りと思われていた作品総数が実は作曲・編曲を合わせ1000近いこと、創作ジャンルが多岐にわたり作風も多様であること、ラジオを拠点に指揮歴も華麗であること等、第二次世界大戦をはさむ激動の時代に、作曲・編曲・指揮・教育までを含む驚異的な活動を展開しておられたのだった。

こうして2冊の目録刊行は、大澤先生の見上げる業績を改めて世に問うことになった。目録は今後、演奏家・研究者・愛好家のための基礎文献としての活用が期待されている。

【資料閲覧と複写】「大澤壽人遺作コレクション」の楽譜は、電子資料化が完了した。コンピューターによる閲覧と自筆譜複写も入手も可能である。詳細は神戸女学院図書館（TEL: 0798-51-8565、kclmsg@mail.kobe-c.ac.jp）、又は大澤資料プロジェクト（osawa_project@yahoo.co.jp ）迄。

Profile 出演者プロフィール

松川 峰子（まつかわ・みねこ）
ピアノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学院音楽研究科を首席修了、H・スエヒロ賞受賞。第6回安川加壽子コンクール入選等、受賞歴多数。2011年日本演奏連盟主催リサイタル、2015年2月にもリサイタル開催。「大澤壽人スペクタクル」には初回から出演し、《ピアノ協奏曲第一番　二台のピアノ用編曲》等を世界初演。現在、神戸女学院大学非常勤講師。

別所 ユウキ（べっしょ・ゆうき）
ピアノ

神戸女学院大学音楽学部音楽学科を首席卒業、H・スエヒロ賞、クラブ・ファンタジー賞受賞。ベルギー政府（フランス語圏）給費生としてブリュッセル王立音楽院修士課程に留学し、首席修了。これまでに国内外のコンクールで受賞歴多数。「大澤壽人スペクタクルⅢ」に出演。現在、京都聖母女学院短期大学非常勤講師。

眞田 彩（さなだ・あや）
ヴァイオリン

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校卒業後、英国王立音楽院ヴァイオリン科に留学し、首席卒業。1813年設立のThe Royal Philharmonic Society Emily Anderson Prizeを2003年審査委員全員一致で授与。Salzbrug Festival 2005、Santander Festival 2006、ART GOYA International Festival Queen Violin 2013等、NHK-FM、BS番組に出演。

山田 愛子（やまだ・あいこ）
メゾ・ソプラノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。第12回松方ホール音楽賞受賞、平成25年度坂井時忠音楽賞受賞、第49回なにわ芸術祭新進音楽家競演会新人奨励賞受賞、第79回日本音楽コンクール声楽部門入選。関西二期会公演『ナクソス島のアリアドネ』ドリャーデ役でオペラデビュー。「大澤壽人スペクタクルⅠ」に出演。現在、関西二期会会員、神戸市混声合唱団団員、神戸女学院大学非常勤講師。

周防 彩子（すおう・あやこ）
ソプラノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学院音楽研究科修了。関西新人演奏会等に出演。ウィーン国立音楽大学夏期セミナーに参加。関西二期会第78回公演『夢遊病の女』アミーナ役で初オペラ主演デビューを果たす。第79回公演『魔笛』パミーナ役で出演等、演奏会多数。NHK-FM『リサイタル・ノヴァ』に出演。現在、神戸市混声合唱団団員。

蜷川 千佳（にながわ・ちか）
ピアノ

神戸女学院大学音楽学部を経て、同大学大学院音楽研究科修了。2004年ポーランド国立クラコフ室内管弦楽団と共演、ソロの他に伴奏者としても活動。「大澤壽人スペクタクル」には初回から出演。現在、関西二期会、堺シティオペラ各ピアニスト。神戸女学院大学、四條畷学園高等学校各非常勤講師、西宮音楽協会会員。

神戸市混声合唱団
（こうべしこんせいがっしょうだん）

1989年神戸市により設立されたプロの合唱団。豊富なレパートリーを持ち、「音楽のまち神戸」推進に大きな役割を果たしている。2005年ウラディーミル・アシュケナージ指揮NHK交響楽団とモーツァルトの《レクイエム》（阪神・淡路大震災10年）を共演。2010年にはラトビアからの招聘により、世界的に有名なアヴェ・ソル合唱団とジョイントコンサートを行い、姉妹合唱団協定を結ぶ。澄みきったハーモニーが高い評価を得ている。

金岡 伶奈・周防 彩子・津田 佳子（ソプラノ）
西本 鑑子・八木 寿子・山田 愛子（アルト）
井澤 章典・土井 淳平・眞木 喜規（テノール）
石原 祐介・中野 嘉章・福嶋 勲（バス）　河内 仁志（ピアノ）

生島 美紀子（いくしま・みきこ）
企画 & レクチャー

神戸女学院大学音楽学部を経て、スタンフォード大学大学院修了。音楽学で日本人初のM. A. 取得。大阪大学大学院博士後期課程修了。アルチュール・オネゲルの研究論文により博士号取得、同論文を行路社より出版。2006年より「大澤壽人遺作コレクション」に責任者として携わり、編集代表した作品資料目録『煌きの軌跡』は音楽クリティック・クラブ特別賞受賞。2009年スタッフと共に「大澤資料プロジェクト」を設立、代表を務める。講演会やCD制作などを通して大澤壽人氏の音楽の普及活動にあたっている。現在、神戸女学院大学非常勤講師。

Program プログラム

I部 戦前のボストン・パリ留学時代
和魂洋才とウルトラモダン

三つのプレリュード Three Preludes（1933年4月ボストン）再演　別所 ユウキ（Pf）

ナイト・モノローグ Night Monologue（1933年4月ボストン）82年ぶり復活演奏　眞田 彩（Vl）別所 ユウキ（Pf）

シャンティ Chanty（推定1930-34年ボストン）再演

ノクターン Nocturne（推定1930-34年ボストン）再演　山田 愛子（Mezzo Sop）蜷川 千佳（Pf）

《ピアノ組曲 Suite für klavier》作品25より 第2曲〈ガヴォット Gavotte〉
アルノルト・シェーンベルク作曲（1923年）

ピアノ組曲《私の日記から From My Diary》より 第3・第4曲
ロジャー・セッションズ作曲（1939年）

《パターンズ Patterns》
大澤 壽人作曲（1934年3月ボストン）創作以来81年 世界初演　別所 ユウキ（Pf）

《六つのカプリチェッティ Six Capricceti》
大澤 壽人作曲（1934年3月ボストン）再演　松川 峰子（Pf）

桜に寄す ピアノ伴奏版
Une voix à SAKURA pour soprano et orchestre, Arrangement pour piano（1935年10月頃パリ）
周防 彩子（Sop）蜷川 千佳（Pf）

休憩20分

II部 帰国から戦後まで

帰朝演奏会の頃と晩年の《ABCホームソング集》混声合唱版

ロンディーノ ／ 立居 寛詩（1936年10月神戸）78年ぶり復活演奏　　周防 彩子（Sop） 蜷川 千佳（Pf）

走馬燈 ／ 一柳 信二詩（1936年3-5月頃神戸）79年ぶり復活演奏　　山田 愛子（Mezzo Sop） 蜷川 千佳（Pf）

ヴァイオリン小協奏曲「支那詩」より 第1楽章（1936年神戸）再演　　眞田 彩（Vl） 別所 ユウキ（Pf）

丁丑春三題（ていちゅうはるさんだい）（1937年神戸）　　松川 峰子（Pf）

《ABC朝日放送ホームソング集》より（1952-53年西宮）

春の扉	南谷 健一作詞・竹中 郁校訂	
ひまわりの歌	喜志 邦三作詞	
公孫樹のロンド	安西 冬衛作詞	
冬ごもり	安西 冬衛作詞	
薔薇の花かげ	牧 昇治作詩・安西 冬衛校訂	神戸市混声合唱団（Chor） 河内 仁志（Pf）

パリ時代

帰国後、愛用のベヒシュタイン製ピアノの前で

PROGRAM NOTE
プログラムノート

戦前のウルトラモダンから戦後の混声合唱まで

生島 美紀子

Ⅰ部：戦前のボストン・パリ留学時代
和魂洋才とウルトラモダン

■ ボストン ■

大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）は1930年に関西学院高等商業学部を卒業した後、アメリカに留学。同年9月よりボストン大学音楽学部で作曲の勉強を始めた。日本では独学だったが、正式に習い始めると直ちに頭角を現し、イングランド音楽院にも入学した1932年頃から創作力はあふれ出る勢いだった。《交響曲第一番》や《ピアノ協奏曲第一番》、ボストン交響楽団指揮者のセルゲイ・クーセヴィツキに献呈した《コントラバス協奏曲》など、いずれも日本初、或いは日本最初期の大作を続々と作曲。質・量共に圧倒的な創作活動を展開した。その成果はわずか4年の間に、演奏会用作品総数46、総譜623頁を含む楽譜総頁数1100頁超。まさに天賦の才がボストンで花開いたのである

大澤の創作ぶりは、複数の作品を並行しながら作曲するのが常だった。大作の傍らで小品が次々と生まれていった。ピアノ独奏曲・ヴァイオリンとピアノのための曲・ピアノ伴奏による歌曲など、小編成で書かれたこれらの作品には、日本人としての心情や、当時の最先端の音楽に刺激を受けた感性が、交響大作よりもむしろ直接的に映し出されている。「和魂洋才」や「ウルトラモダン」と言うべき、独自の作品世界が形成されたのである。

《三つのプレリュード Three Preludes》は、1933年4月に作曲されたピアノ独奏曲。当時、大澤はボストン大学に卒業作品として提出しようと《ピアノ協奏曲》の作曲にかかっていた。「日本初のピアノ協奏曲を作曲する」と意気込み、大作の完成を目指しながら、並行して《三つのプレリュード》を書いていた。

大澤の初の献呈作であるこの作品は、幼い姪たちに捧げられている。宇野家に嫁いだ姉、文子の三人の娘を大澤はとても可愛がっており、当初は《三人の少女の小ポートレート》という作品名であった。

第1曲:アンダンティーノ、第2曲:恵子のセレナーデ、第3曲:アレグロ・ヴィヴァーチェから成り、それぞれニ長調・ト短調・イ短調である。ニ音を中心に5度下のト音、5度上のイ音が配置された楽章構成は、伝統的な調性システムに基づく。

ヴァイオリンとピアノのための《ナイト・モノローグ Night Monologue》も、《三つのプレリュード》と同時期の1933年4月に作曲された。次々と優れた作品を発表する大澤は、ボストン大学とイングランド音楽院の教師たちを驚かせたに留まらず、期待の新進作曲家としてボストン音楽界に知られるようになっていた。そんな大澤に、大学同級生でヴァイオリン専攻のロバート・コーエンは、自分の卒業リサイタルで演奏したいと新作を委嘱し、この作品が誕生した。大澤のヴァイオリンとピアノのための作品には、ボストンに着いて間もない1930年に書かれた《憂鬱な即興曲 Impromptu Melancolique》があり、それに次ぐ2作目である。

《ナイト・モノローグ》はホ短調で、A-B-Aの三部分形式。民謡音階に基づく日本風の旋律を主題としている。作曲の翌月、1933年5月9日にボストン大学ジェイコブ・スリーパー・ホールに於いて、コーエンの

ヴァオリンと大澤のピアノによって初演された。本日は初演以来82年を経た復活演奏である。

ピアノ伴奏による英語歌曲《シャンティ Chanty》と《ノクターン Nocturne》は、神戸女学院における自筆譜調査の過程で偶然発見された。同一五線紙に続けて書かれているので同時期に作曲されたと思われるが、大澤の署名がある他は、作曲年や詩について一切記されていない。書簡にも言及はないが、英詩を取り上げている点と筆致から、ボストン滞在中の1930-34年に創作されたと推定される。C・モトヤマによれば、両詩とも象徴詩の特徴を持つという。

「シャンティ」はShantyとも綴られる水夫の歌で、転じて仕事の歌でもあるが、この詩では何の仕事か明らかにされない。冒頭の「弱い風」という言葉が示す様に、風の音は乞食の物乞いや犬の哀れな鳴き声を連想させ、比喩的に心象風景を表している。

「ノクターン」は豊かな比喩を用いている。「いがの様に付着するランプ」や「目に見えない淡い緑の葉がしおれる」など、読者の感覚に訴えながら夜を描写していく。静けさ(1行)と鐘の音(9行)、闇(2行)と夜明け前の明るさ(最終行)は、対照を成して夜の雰囲気を伝えている。尚、原曲は低音部譜表を用いているのでバリトン歌手を想定したと思われるが、本日は1オクターヴ上げた女声による演奏である。

CHANTY
Last night a thin wind
Snuffed at my palms
And whined like a beggar
Asking for alms
So I took out and tossed him an old letter
Which he carried off,
And we both felt better.

NOCTURNE
Silence.
But the dark stirs uneasily.
Like golden burrs
Lamps cling with slender bright
Barbs on the cloak of night.
Around the lamps, pale green leaves droop unseen
Blossoms throw a fine snare of fragrance on the still air,
With notes like opening flowers
Slow bells chime hour.
Presently graves will yawn
And skeletons will walk till dawn.

さて、「スペクタクルⅣ」の特別企画として、以下の4作品をご紹介する。大澤を含む3人の作曲家による作品を比較しながら、「20世紀前半の世界最先端の音楽」を聴いて頂く。大澤と巨匠たちとの接点や、今の私たちにも訴えかける大澤の「時代を超える前衛性」に触れて頂こうと思う。

アルノルト・シェーンベルク作曲《ピアノ組曲 Suite für klavier》作品25は1923年の作品で、20世紀前半の西洋音楽史を画すると知られている。18世紀以降、西欧音楽の根幹であった機能和声法は

徐々に衰退し、20世紀に入る頃には無調の時代を迎えていた。シェーンベルク(1874-1951)は無調の組織化に挑み、新たな作曲法である「十二音技法」を考案。《ピアノ組曲》全曲を初めて十二音技法で作曲して、音楽史上に新時代を切り拓いた。その第2曲が〈ガヴォット〉である。

大澤がボストン留学中の1933年に、ユダヤ人であるシェーンベルクはアメリカに亡命し、ニューヨークとボストンを行き来した。大澤はシェーンベルクに日本人作曲家として初めて接し(これまで橋本國彦とされてきたが、そうではないことが生島の最新の研究によって判明した)、巨匠の革命的な音楽思想から多大な影響を受けた。

ロジャー・セッションズ作曲《私の日記から From My Diary》は1939年の作品。シェーンベルクに影響を受けた作曲家はアメリカにも多く、セッションズ(1896-1985)はその代表格だった。アメリカ国内で十二音技法について講演し、シェーンベルクの代弁者のような役割を担い、セッションズ自身も急進的な作風で知られていた。ピアノ組曲《私の日記から》は日本では余り知られておらず、おそらく本邦初演である。4曲はいずれもアメリカの作曲家たちに捧げられており、第3・第4曲はそれぞれカーター・ハーマン(1918-2007)とヴィヴィアン・ファイン(1913-2000)への献呈作である。

大澤はボストン音楽界で知られるようになった頃にセッションズと面識を持ち、彼を通じて「ウルトラモダン派」を標榜するアメリカの若手作曲家グループに関心をもった。大澤が新しい音楽を志向した一因は、この点にもあったと思われる。

大澤壽人作曲《パターンズ　Patterns》は創作以来81年を経て、本日、世界初演を迎える。大澤は1933年のピアノ独奏曲で調号を捨て、初の「無調」に挑んだ。《パターンズ》はその後の1934年3月の作品であり、やはり調号を持たない。この小規模なピアノ組曲は極めて短い5曲から成り、互いに異なる楽想が瞬く間に展開される。その煌くばかりの斬新な響きが、まさしく「ウルトラモダン」と言えよう。

《六つのカプリチェッティ　Six Capricceti》は《パターンズ》と同時期に作曲された。両作品を比較すると「無調のピアノ組曲」という点は同じだが、作品の趣が異なる。20世紀前半の作曲家たちは、衰退した調性に代わる創作の方法を求めてそれぞれに歩んだ。ボストンに渡った大澤もその一人。独自の音楽語法を探求しつづけ、「無調」の中に独特の彩りを織り込んだのである。

《六つのカプリチェッティ》については、後年日本のラジオ放送用に書いたと思われる大澤の原稿が遺されているので、補足して引用する。尚、初演はパリとされるが、詳細は不明である。

> 1934年のある日、私がピアノに座っていた時に、心の赴くままに一息ずつ書き上げたのが《六つのカプリチェッティ》という極く短編のピアノ曲集であります。伊語でカプリチオとは自由な形式とスタイルを持つ楽曲であり、小規模なカプリチェットが複数になってカプリチェッティとなるのであります。これらの曲はポリハーモニー(多和声)、ポリトナリティー(多調)、アトナリティー(無調)の気分があり、全体に於いて対位法的に組み立てられております。

■ パリ ■

ボストンで充実の成果を収めた大澤は、1934 年 10 月にフランスに渡った。既に高い評価を受けていたが、さらなる助言を求めてパリのエコール・ノルマル音楽院に入学。ポール・デュカ（1865-1935）の作曲クラスに入り、並行して名教師の誉高いナディア・ブーランジェ（1887-1979）の個人レッスンを受けた。

翌 1935 年 11 月にはパリのサル・ガヴォーに於いて、コンセール・パドゥルー管弦楽団を率いて、自作自演と指揮による大演奏会を開催。当日は「フランス六人組」のオネゲル、ミヨーをはじめとして、イベール、ビュッセル、ケックラン、タンスマン、A・チェレプニンなど、パリ楽壇の重鎮から居留の「パリ派」まで、きら星のような作曲家たちが来場した。大澤は自身の新作とフランスの伝統的作品の全曲を一人で指揮し、大喝采を浴びた。この華麗なパリ・デビューによって、当時の世界楽壇パリで成功を収めた初の日本人作曲家・指揮者として、キャリアのピークを築いたのである。

《桜に寄す ピアノ伴奏版 Une voix à SAKURA pour soprano et orchestre, Arrangement pour piano》は、その煌く晩に《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》と共に初演された。大澤の歌曲のジャンルの代表作で、管弦楽伴奏による。歌詞は大澤によるもので、私たちに馴染みの古謡《さくらさくら》が引用されている。自筆譜に記された歌詞は、初演のロシア人ソプラノ、マリア・クレンコ（1865-1935）のためにローマ字である。本日は大澤自身によるピアノ伴奏版を用いて演奏する。

尚、《桜に寄す》は 2012 年以降、春のシーズンに NHK「名曲アルバム」で放送される。神戸女学院キャンパスの映像が流れる中、高関健指揮／東京フィルハーモニー管弦楽団、ソプラノ独唱釜洞祐子で演奏されている。

ああ、ふるさとの春の想いは
さくらさくら　と歌うころ
弥生の空は　見渡すかぎり　霞みか雲か　匂いぞ出ずる
（ハミング）花に慕うとも　いにしえのままに歌い
いざやいざや　見にゆかん

Ⅱ部：帰国から戦後まで

帰朝演奏会の頃と晩年の《ABC朝日放送ホームソング集》混声合唱版

■ 帰朝演奏会の頃 ■

1936年2月、大澤はパリでの大成功を土産に帰国した。早速5月・6月に東京と大阪で帰朝演奏会を開いて留学の成果を披露。翌1937年も同様に、4月・12月に作品発表会を開いた。当時の日本作曲界に、年2回も交響大作を発表する作曲家は大澤の他にいなかった。

さて、大澤は1937年から神戸女学院の教壇に立った。同年4月に日比谷公会堂で開かれた「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」は、同学院同窓会（めぐみ会）東京支部主催。詰めかけた着物姿の同窓生たちで、会場は賑わったという。

1936年10月完成の管弦楽伴奏による歌曲《ロンディーノ》は、この演奏会において、大澤自身の指揮による新交響楽団（NHK交響楽団の前身）とソプラノ独唱長門美保によって初演された。本日はこの初演以来78年ぶりの復活演奏で、大澤自身が編曲したピアノ伴奏版を用いる。

「ロンディーノ」は音楽用語で小型のロンド形式を意味する。「うたはいづみに めぐります」の行が循環する立居寛の詩に合わせ、音楽も巡りながらA-B-A-C-Aの小ロンドを形成する。やわらかな雰囲気を醸し出し、新作発表の「春」の季節にふさわしい麗しい作品である。

うたはいづみに　めぐります
そよかぜに　みどりの　かげさせば
ほのかに　をとめの　ふえのねして
はる　はる　はると　みづにうたふ

こころは　あをぞらにさり
ふえのね　くもとゆくしばし
いこふおもてに　うきくさのかげさせば

うたはいづみに　めぐります
そよかぜに　みどりの　かげさせば
ほのかに　をとめの　ふえのねして
はる　はる　はると　みづにうたふ

みづにみどりのきえて
うたはかぜとさるころも
をとめののぞみはかわらず　ふえのねさらず

うたはいづみに　めぐります
こころ　わかばに　かげおへば
ほのかに　をとめの　ふえのねして
はる　はる　はると　みづにうたふ

《走馬燈》は帰国後に作曲された管弦楽伴奏による歌曲。1936 年 6 月大阪朝日会館に於ける「巴里新帰朝 大澤壽人作曲指揮交響音楽会」で、大澤指揮／宝塚交響楽団、ソプラノ独唱長門美保によって初演された。本日は 79 年ぶりの復活演奏にあたる。

「走馬燈」は一柳信二の『第三詩集』に含まれる詩である。チェリストで優れた詩人でもあった一柳は、現代日本を代表する作曲家、一柳慧氏の父。大澤にとっては関西学院の先輩にあたり、留学前に共演するなど二人は親しい間柄だった。大澤はこの先輩に敬意を表して、《走馬燈》の管弦楽にチェロ独奏を用いている。本作品の自筆譜管弦楽版は残念ながら現存せず、本日聴いて頂くピアノ伴奏版のみが遺されている。

かぜにふかれて　はしる　あおいかげえ
なにのふきつか　ならぶうま　うま　うま
なつのよいやみ　ぽうれいのぎょうれつ

《ヴァイオリン小協奏曲「支那詩」》は 1936 年に作曲され、1937 年 4 月に既述の「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」で初演。大澤自身が新交響楽団を指揮し、ヴァイオリン独奏は日々野愛次だった。当日のプログラムによれば、この作品は「支那の音楽に関する書物を読んで居る時拾い挙げた一つの旋律を中心として作曲した」という。

ボストン留学以来、大澤の交響作品創作の眼目は「ソナタ形式の追及」にあった。西欧が築き上げた最高の音楽形式であるソナタ形式を鋳型にして、日本出自の作曲家としていかに独創的な音楽を創り上げるか、という観点から作曲活動を続けた。

《支那詩》第 1 楽章は自由なソナタ形式。冒頭、ヴァイオリンによって「レレラドレ」と日本の旋法を思わせる第 1 主題が示され、やがて 3 連符と半音階による無調的な第 2 主題が登場して、提示部に対比を形作る。この間、管弦楽は「タター」というシンコペーションのリズムと、祭り囃子の様なリズムで個性を強調し、ヴァイオリンのカデンツァが提示部を締めくくる。

展開部は短く、その個性的なリズムを主に構成される。再現部は管弦楽による「レレラドレ」に始まり、ヴァイオリンが華やかなカデンツァを奏した後、急速なコーダが続いて終了する。作品名は《支那詩》だが、音高の選択には日本的な要素も西洋的な中心音指向も見られ、楽想が要所で対位法的に展開される点に、神戸から欧米を駆けめぐった大澤の豊かな経験が反映している。

本作品は、2007 年に神戸女学院大学音楽学部定期演奏会で復活演奏された（指揮中村健、ヴァイオリン独奏辻井淳）。尚、大澤自身によるピアノ伴奏版は存在しないため、管弦楽部分にピアノリダクションを行い（2015 年生島）、「スペクタクルⅣ」用の編曲とした。

《丁丑春三題》は大澤のピアノ独奏曲の中で、素直な美しさを感じさせる作品である。「丁」は十干の丁、「丑」は十二支の丑を意味し、作曲された 1937 年が「丁丑」であった。初演は同年 7 月で、4 度目の来日中だったフランス人ピアニスト、アンリ・ジル=マルシェックス（1894-1970）が神戸の海員会館に於いて行った。

ジル=マルシェックスは初来日時の 1925 年に、ドビュッシーやラヴェルなど数多くの作品を本邦初演。日本音楽界にフランス近代音楽の真髄を紹介し、定着へと導いた功績者である。大澤は初来日のジル=マルシェックスの演奏を聴いて音楽家になろうと志し、1935 年のパリでの自作自演大演奏会では《ピアノ協奏曲第二番》を彼に献呈して、初演を依頼。以来、二人は国境を越えて親しい友人同士だった。

《丁丑春三題》は 3 曲から成り、それぞれに副題が添えられている。第 1 曲〈春宵紅梅〉は大澤が尊敬するドビュッシーの影響が色濃い。嬰ヘを中心音とする柔らかな分散和音に始まり、最弱音に消えてゆく繊細な音楽で、途中聞こえてくる中音域の旋律は嬰ト中心音としている。心地良く進むにつれ、その嬰トが低音域の構造音に変化していく書式は見事である。

第 2 曲〈無為即興〉は無調的な要素が強い。断片的な旋律、うごめきだけを感じさせるリズム型など、春の雰囲気を創出するために大澤が用いた音型は多彩で、〈無為即興〉の「漠とした印象」は、実はきわめて緻密なプランによって構成されたことが明らかである。〈春宵紅梅〉とは印象が全く異なるため気付きにくいが、2 曲を通して旋律と構造の中心音が統一されており、その手法の洗練が作曲家の職人技を示している。

第 3 曲〈春律醉心〉は春爛漫の気分に満ちている。花見の酔客の足取りの様なパッセージで始まり、やがて聞こえてくる《元禄花見踊り》の一節が宴の賑わいを想起させる。人々の上機嫌を写すかの如くに駆け上がるパッセージは、日本の旋法 2 種の組み合わせで、西洋の「複調」の日本式応用である。その上行パッセージの勢いとグリッサンド効果の中で、《元禄花見踊り》の冒頭が派手に鳴って終了する。

《丁丑春三題》にはこのように、西洋の作曲法を完璧に身に付けた大澤ならではの表現が随所に見られ、その卓越した技術によって「日本の春」を華やかに描き出す。1930 年代に作曲されて以来、作品の瑞々しい命は 80 年近く経った今も輝きを失っていない。この作品こそ、国内外で活躍する日本人ピアニストのレパートリーにふさわしい「珠玉の名品」であろう。

■ 戦後 ■

大澤の生涯を概観すると、ボストン留学中に満州事変が勃発した。以降、帰国後数日で二・二六事件が起こり、《丁丑春三題》の頃に日中戦争、そして第二次世界大戦突入と、音楽活動は激動の時代と共にあった。演奏会場における作品発表会の開催は困難となり、その場はラジオ・映画・舞台へと移った。同時にそれは創作ジャンルの拡大を意味し、大澤の活動に様々な色彩を施しながら、作品総数約 1000 という広大な世界を築いていった。

戦前～戦中～戦後を通して主たるメディアはラジオだった。朝日放送（Asahi Broadcasting Corporation）は戦後の 1951 年に放送を開始。大澤は音楽担当として、準備段階からこの日本初期の民間放送の事業に関わっていた。開始当日、第一声の開局のアナウンスに続いて流れたのは、初番組「朝日新聞ニュース」のために大澤が作曲したテーマ音楽だった。ABC 朝日放送はまさに大澤の音楽と共に始動したのである。

「ABC ホームソング」は朝日放送の音楽番組の一つで、1952 年からスタート。月曜から金曜まで午前の定時に同じ歌が流れ、週が替わると歌も替わる。大澤は「健全で家庭的」であることを目指しながら、毎週新しい歌を書き続けた。

だが49週で大澤が急逝。シリーズは突然中断し、はからずもホームソング第49曲〈木の下のワルツ〉は遺作となった。しかし、大澤が先鞭をつけた人気番組の再開に対する要望は多く、後に復活して数々のヒット作を生む長寿番組となったのである。

本日は没後に刊行された《ABC 朝日放送ホームソング集》より〈春の扉〉〈ひまわりの歌〉〈公孫樹のロンド〉〈冬ごもり〉〈薔薇の花かげ〉を選んで聴いて頂く。春に始まり、四季を巡って春に戻るこれらの 5 曲は、60 年以上も前に作曲されたとは思えないおしゃれな歌ばかりである。戦前、ボストンとパリで華麗な成功を収めた大澤は、敗戦から復興中という時期に、音楽で何が出来るかと考えたであろう。母国の人々を励ますために、大澤が贈った色とりどりの「音楽の花束」、それが《ホームソング集》である。

尚、ホームソングは管弦楽伴奏で放送された。毎週まず独唱で歌われ、混声合唱が続いた。自筆総譜は所在が不明だが、大澤自身が編曲したピアノ伴奏版が遺されている。そのピアノ伴奏による混声合唱版を演奏する。

「春の扉」南谷健一作詞・竹中郁校訂

雪どけ道のそよ風に
吹かれてまわる風車
そんなはるかな訪れに
春の扉はひらきます
みなみの風の子守唄
幼いひとみに風車

戦前のウルトラモダンから戦後の混声合唱まで／生島 美紀子

「ひまわりの歌」喜志邦三作詞

風にゆれてた向日葵よ
二人の旅の思い出よ
あの丘過ぎて咲いていた
黄金の花よ 日ぐるまよ

「公孫樹のロンド」安西冬衛作詞

黄色い公孫樹の 黄色い落葉
黄色い落葉の 黄色い日南
黄色い日南の 黄色い日ざし
黄色い秋だよ 黄色い公孫樹
黄色い公孫樹の 落葉 落葉 落葉
落葉のロンド

「冬ごもり」安西冬衛作詞

霰コンコンあられ酒
誰も来ぬ夜の置炬燵
紺の掻巻冬の夜半
ひとりさびしいあられ酒

「薔薇の花かげ」牧昇治作詞・安西冬衛校訂

入陽の丘にゆれている
ピンクの花ばら夢の花
あしたはどんな…
どんないいこと あるかしら
乙女のささやき ばらのかげ

※大澤壽人の姓と生年は、通説とは異なる事が調査で判明した。正しくは、「おおさわ」で、「1906年」生まれである。大澤が楽譜にOZAWAと自署しているのは、外国で発音される場合をあらかじめ想定したと思われる。今後は本来の読みである「Osawa」を用いる。

「大澤壽人スペクタクルⅣ」　企画・編集　生島　美紀子　デザイン　森　のぞみ

Hisato Osawa IV

主催:大澤資料プロジェクト
後援:クラブファンタジー(神戸女学院大学音楽学部同窓会)
公益財団法人 神戸市演奏協会
1008 ABC Radio